

リレーエッセイ「橋本道夫先生と私」(第8回)

琵琶湖と世界の湖沼をめぐる国際的な取組



(公財)国際湖沼環境委員会 副理事長 中村正久

橋本先生が我が国の公害環境行政の先導者であると共に国際環境政策の先駆けの役割を果たされたことはよく知られている。しかし、その中で先生が世界の湖沼環境問題の解決に向けた我が国の国際イニシアティブの形成に果たされた大きな役割については比較的知られていないのではなかろうか。

私が橋本先生に初めてお会いしたのは1982年頃だったと思うが、それは勤務していたマレーシアのWHO西太平洋地域環境計画センターの運営委員会の会合においてであった。私はセンターの職員で、先生はWHOから委嘱された運営委員であられた。その時は私が取り組んでいたアジアにおける「水と衛生の10年計画」の話に応じられ、厚生省・環境省時代を通して先生が経験されたWHO業務などについて言葉を交わしたように記憶している。私はその後、長い海外生活に終止符を打って日本に戻ることを決断し、滋賀県・琵琶湖研究所に勤務することとなった。1986年に奉職後まもなく私はその会議場で大きな国際会議が開催されることになっていることを知らされ、会議が開催される直前に吉良所長の意向でオブザーバーとして参加することになった。その時、会議テーブルのセンターに吉良氏と席を並べておられたのが橋本先生だった。当時はこの会議に至る経緯やなぜ橋本先生がそこに居られていたのかについても全く疎かったのだが、その後、会議に至る経緯や会議が生み出した歴史的意義を次のように理解するに至った。

公害の時代から環境の時代へ変遷しつつある1970年代の後半、琵琶湖において突如として大規模な淡水赤潮が発生した。折しも淀川下流域への水供給を一つの目的とする琵琶湖総合開発計画が進捗中であつたことも手伝い、当時の滋賀県知事であった武村正義氏は水質改善を主とする緊急対策を実現する手段として世界湖沼会議の企画を望まれ当時の滋賀県琵琶湖研究所の所長で森林生態学の世界的権威であられた吉良龍夫氏に相談した。吉良所長からは旧制大阪一中の同級生である橋本先生に協力をお願いしたということである。

この国際会議は1984年に開催されるに至ったのだ

が、構想の基本に、一つは住民の幅広い参加を基本方針に据え、市民・行政・企業・研究者が対等に意見を述べあえる会議とすること、もう一つは会議を通して世界の湖沼環境問題の調査・研究成果を実際の湖沼流域管理政策に反映できるようにすることであった。要請を受けられた橋本先生は、第一点目については、我が国が経験した公害問題への取組の過程で、問題を引き起こした企業と彼らの擁護に奔走した行政が結果的に問題解決を遅延してしまったという強い反省の思いを持たれていたため、住民参加の重視を提言した。第二点目については、厚生省時代のハーバード大学やWHO、環境庁・環境省時代のOECD出向やUNEP活動の支援を通して得た豊富な国際経験と人的ネットワークを通し、国際機関を通じた各国との連携や国内外の学術機関を通じた幅広い科学的知見の重視を提言した。

これらの提言をもとに開催された会議の成功は国内外から高く評価された。会議を支援した国連環境計画(UNEP)の事務局長であったM・K・トルバ氏は、この世界湖沼会議はUNEPが求めていた取組と軌を一にしているとされ、この会議を世界的に定期的に継続すること、及び世界の湖沼環境改善の取組を支援する国際的な科学委員会を設立すること、の二点を提唱した。前者については、会議は以降も世界湖沼会議という名を冠して継続的に開催されている。後者については、国内外の湖沼環境問題に取り組む国際湖沼委員会(ILEC)が設立され、橋本先生はその後、1987年9月より1996年12月までILEC副理事長、1988年4月より1995年3月までILEC科学委員として世界の湖沼環境問題解決に向けた国際イニシアティブの形成に大きな功績を残された。1995年に茨城県・霞ヶ浦で開催された第5回世界湖沼会議では、企画運営委員長、科学プログラム委員長という2つの大きな役割を果たされ、霞ヶ浦における様々な湖沼環境改善の取組を加速させ、同時に霞ヶ浦という湖のグローバルな位置づけにも大きな貢献をされた。

以上、本リレー講座への寄稿を通して湖沼環境分野における橋本先生の大きな貢献を振り返る機会を頂いたことに感謝の意を表したいと思います。